

Title	論争する氏と天皇：『高橋氏文』の祭祀技術と起源神話をめぐって
Sub Title	Argments beteen "clan" and "Emperor"
Author	三品, 泰子(Mishina, Yasuko)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1995
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.68, (1995. 5) ,p.1- 19
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00680001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論争する氏と天皇

——『高橋氏文』の祭祀技術と起源神話をめぐって——

三 品 泰 子

一 氏文と八世紀の宮廷祭祀

『高橋氏文』とは、八世紀末の古代宮廷において、天皇の御膳や祭祀の神饌に関わりをもつ、内膳司奉膳職の負名氏である高橋氏が、その関わり方の深さを追求した書である。

そもそも、八世紀末から九世紀初めにかけての一時期、氏文という、氏の出自や職の起源についてのテキストが、集中的に氏自身の手によって記述され公開された。この「氏文の時代」と称される一時期の現象について、すでに日本書紀や古事記があるにもかかわらず、何故わざわざ氏自らによって書かれねばならなかったかということが、氏文というテキスト群をめぐるときの出発点としてある。

これについて、神祇官の内部で齋部氏と中臣氏が、祭祀の時に御幣を捧げるといふポストをめぐって論争したことが契機となつて『古語拾遺』が書かれたり、内膳司の内部で高橋氏と安曇氏がやはり祭祀に関する事で論争し、『高橋氏文』

や安曇氏の氏文が書かれている。このことから、祭祀への関わり方をめぐる論争がこの時期にあちこちで沸き上がり、論争での主張のやり方の一つとして、氏文というテキストを書くことも行われたと考えられる⁽¹⁾。

それと同じ時期に、弘仁式を初めとする各役所の施行細目についての公的な法典が編纂されており、その中の祭祀部門を書くための材料として、氏文が提出させられたという説もある⁽²⁾。これは、祭祀への関わり方をめぐる論争が、何故この時期に氏々の間で起こったのかということを、背景として説明してくれる。しかし、そもそも祭祀の公的な施行細目のテキストを造る営みの一端に食い入るべく、他氏と対抗するというのは、それ自体、やはり祭祀への関わり方をめぐる論争の表現行為の一つである。

それでは、祭祀への関わり方をめぐって氏々が論じ合い競い合っていたのは、なぜなのだろうか。これについて考えるには、それ以前とも以後とも違う、この一時期に固有な、八世紀の宮廷祭祀の現場で、何が起こりどのように動いていたのかに目を向けてみる必要があるだろう。このような問題意識を抱くとき、『高橋氏文』というテキストの内部に存在する、祭祀の現場での実践に向かって繋がるための結節点もしくは結び目のようなものが、鍵を握っている。

すなわち、『高橋氏文』の起源神話では、どのような器にどのような分量で御食を盛り分けるかとか、御食を捧げ持つときの装束は何でどのように作り身体を装うか、また宮中の御膳神をどのような神格として祀るかといった祭祀技術が、高橋氏にとっての「料理」として語り出される。この主張は、同じく「料理」をする、御巫や神部や卜部といった神祇官に所属する祭祀官たちとの、競合の場に向かってなされた表現であったと考えられる⁽³⁾。またそれだけではなく、祭祀技術が競われる八世紀の宮廷祭祀を、太政官の側が記述したテキストである太政官符を、引用というやり方で氏文の内部に取り込み、『高橋氏文』の一部として出している。『高橋氏文』の内部では、高橋氏の職の起源神話と太政官符とい

う本来異質のものですが、祭祀行為の孕む技術としての「技」、という一点でリンクしているのだ。

そこで、この太政官符を取り上げて、祭祀の関わり方をめぐって展開していく論争から、起源神話と直通する祭祀技術の「技」について考えていこうと思う。

二 はじまりの「技」

場面は、神今食という宮廷祭祀の場。そもそも、神今食や大嘗祭といった天津御食をめぐる宮廷祭祀において、高橋氏は鰻の羹という御食を、安曇氏は海藻の羹という御食を、それぞれ膳屋から神殿の入口まで捧げて持つてくるといって、祭祀行為をする者である。この、「天津御食を斎ひ忌はり取り持つ」という職掌の、「取持」ち方、つまりいかに御食を捧げるかというやり方の一部が、改めて問い返されこだわりの核となっていた。

① 聞く如く、先代の行ふ所、神事の日、高橋朝臣ら前に立ちて供奉し、安曇宿禰ら更に争ふ所なし。

但し飯高天皇の御世に至り、靈龜二年十二月神今食の日、奉膳従五位下安曇宿禰刀、典膳従七位上高橋朝臣乎具須比に語りて曰く、「刀は官の長たり、年の老たり。前に立ちて供奉せんことを請ふ。」⁽⁴⁾

ここで問題になっているのは、どうやら、膳屋から神殿の入口まで御食を捧げて運ぶときの行列の中で、高橋氏と安曇氏のどちらが先に並ぶかという、行列の順番のどのようなことである。しかし何よりもここで注目したいのは、御食を捧げて並ぶときの順番が、ある日突然に祀り方の「技」として取り出されてきたという、当事者のこだわり方についてで

ある。

そもそも、御食を捧げて並ぶときの順番が問題になる以前、安曇氏ら御食を捧げる当事者の意識では、自分の捧げる御食が神殿内部の天皇と神座に届けばよいわけで、自分の御食と他人の捧げる御食との間の順番については、何の意味も見出ししてはいなかっただろう。それが、「高橋朝臣ら前に立ちて供奉し、安曇宿禰ら更に争ふ所なし。」の示すところである。しかし霊龜二年（七一六年）十二月神今食の日に安曇宿禰刀という者は、この「順番」に、祭祀の場での力関係を見出ししてしまったのである。

この祭祀の場での力関係について、従来の説明では、律令制の官位の上下が祭祀の場でも視覚的に反映されるように、官位の上の者が行列の前、つまり天皇のより近くに侍奉することを主張したものだと言われてきた。⁽⁵⁾確かに、安曇宿禰刀の発言の中には、官位の上下が、自分が先にならぶことの根拠の一つとして取り上げられている。しかしそれと同時に年齢の上下のことも言っていて、必ずしも律令制度の優先を主張しているわけではない。安曇氏が高橋氏の先にならぶという順番を主張するときの、主張のやり方として、官位や年齢の上下の問題を引っ張り出してきたにすぎない、と思われる。

つまり、官位や年齢の上下といった、既に存在している力関係を視覚化して表すといったことが問題になっているのではない。そうではなく、安定しているかに見えるシステムから、絶えず変化し生成しようとする力を挑発し発きたてる、在り方の一つとして、「順番」が論争されているのだ。「順番」という一点に彼らが過敏になっていったのは、そこが、差別（差異）や権力（力関係）などが生々しく露出し、力が出てくる地点であることに、意識しはじめたからであろう。⁽⁶⁾

このようにして論争ははじまるのだが、それでは、安曇氏が高橋氏の前という順番による、御食の捧げ方を主張してきた安曇宿禰刀に對し、このあと高橋氏サイドはどのようにことばを投げ返していったか。

② この時乎具須比答へて云く、「神事の日、御膳に供奉するは膳臣らの職にして、他氏の事にあらず。」しかして刀、猶強ひて論じ、乎具須比肯はず。かくのごとき相論、内裏に聞こへて勅判あり、「累世神事更に改むべからず。宜しく例に依りてこれを行ふべし。」これより以来、争論有ることなし。

官位や年齢を根拠にして、安曇・高橋の順番を主張してきた安曇宿禰刀に對し、高橋朝臣乎具須比はさらにとんでもないことを口走る。神事の際の御膳に仕えるのは、「膳」を名を持つ膳臣（高橋氏の改姓前の名）だけであつて、「他氏の事」ではないと言ふ。つまり、御食を捧げるといふ祭祀行為をするのは、高橋氏だけの特権であつて、安曇氏が御食を捧げること自体を否定しているのである。安曇・高橋の順番で御食を捧げるといふ祀り方の説を、安曇氏が出してきたのに對し、高橋氏は、高橋だけが御食を捧げるといふ、これまた新たな異説を出してきたわけだ。

これらの異説の生成に對し、天皇は勅判というかたちで、高橋が安曇の前という順番の説を出す。その根拠は、「累世神事」のやり方を改変してはいけないというもので、安曇氏と高橋氏の説に對する自分の説の正統性を、「累世神事」に求めている。確かに、御食を捧げるときの順番が問題に挙がる以前、安曇氏は高橋氏の後に並んでいたが、それは、当事者にとつては、「順番」ではなかつたはずだ。そこを逆手に取つて、以前からの並び方を「順番」として捉え直し、それを安曇氏や高橋氏が主張する異説に對する、正統的な説として出したところに、相論の中での天皇の戦略がうかがわ

れる。靈龜二年（七二六年）のこのたびの論争は、天皇の説が二氏の説を圧倒し、以後そのやり方で祭祀が行われてきたが、それから約半世紀後の宝龜六年（七七五年）に、再びこの問題が沸騰してくる。

③ 宝龜六年六月神今食の日に至り、安曇宿禰広吉強ひて前に進みて立ち、高橋波麻呂と相ひ争ひ、広吉を挽却す。

「前回は「相論」という、ことばの投げ掛け合いだったが、今回は「相争」という、身振り手振りによって御食の捧げ方をめぐる説が競い合われている。これは一見、単なる殴り合いの暴力行為にしか見えないかもしれないが、やはり前回に出した説を、互いに身体を使って表現しているのである。安曇広吉は安曇が高橋の前に立つべく、神事のさなか、御食を捧げて並んでいるまさにその時、高橋波麻呂の前に割り込んでくる。一方高橋波麻呂は、高橋だけが御食を捧げるべく、安曇広吉を行列から挽きずり出す。

このように、御食を捧げるときのならび方をめぐって、安曇氏と高橋氏は説を競い合い加熱していくわけだが、それにしても、なぜ彼らはこんなにも祀り方の「技」をめぐって饒舌になっていくのか。また、祀り方の「技」を語ることは、「技」を実践する当事者にとって、どのような意味をもつ営みだったのだろうか。

こうした祭祀技術をめぐる論争の問題を考える上で、祭祀行為のそれぞれの当事者が、自ら実践する「技」をめぐる秘事・口伝を書き記した、中世の秘事口伝書が参考になる。中世の祭祀実践者にとって、秘事を語り出してしまふことや口伝を書き記してしまふことは、「技」をめぐる競合の一環としてあった。だから、これらのテキスト群を通して、いかに祭祀行為の一部が突出し、「技」として意識され始め、展開していくのか。またそれは、当事者にとってどのような

意味をもっていたのかを、読み取ることができそうだ。

三 秘事口伝の問答から

神今食や大嘗祭の神饌供進の神事において、神饌を膳屋から神殿の入口まで捧げ運ぶという祭祀行為をする者である、高橋氏と安曇氏にとって、ある一時期、特別な意味を帯びて関心の的として浮上してきたのが、先にみてきたように、神饌を捧げるときの行列のならび方であった。一方、本柏という、御酒を盛る器を作る宮主職の者にとっても、絶えず本柏の作り方の技術が問い返されていた。そこで、この宮主職を出す家であるト部氏が、宮主の実践する「技」についての秘事・口伝類を中世（南北朝時代）に記述した、記録の集成である『宮主秘事口伝』から、本柏をめぐる議論の箇所を取り上げる。

仰せに云く。神膳の儀、本柏は秘事なり、重事なり。能々存知すべし。云々。

兼豊、次第を以て残る所無く采女に仰せ含む。また殿下、御問答有り。

詮ずる所の代々の次第・記録、兼日に披見し、了見を加ふべきなり。

一、寸尺などの事。

(中略)

また仰せに云く、本柏は何枚か。云々。

申して云く、本柏とは、安芸の説と称すは（安芸と称すは、根本の采女の名なり）、柏の本葉一枚を以てその本を結び候ふ。

また仰せに云く、本柏は十枚なり。

仍りて後日引勘のところ、十枚なり。藁の穂を以てその本方を結び合はしむ。云々。

已上、延慶の兼日問答の記なり。⁽⁷⁾

神饌供進の儀の時、神殿の内部にまで入ることができるのは、天皇以外では、陪膳采女と宮主と摂政関白だけである。右に挙げた記事は、大嘗祭に先立つ数日前にこのメンバーが一室に集まり、外からはうかがい知ることのできない神殿奥の部屋での儀式について語り合った、問答の記である（冒頭の「仰せに云く」の話者は「殿下」、すなわち摂政関白。兼豊は宮主。それと采女が隣席している）。なかでも特に本柏をめぐる問答であるが、ここで注目されるのは、外に向かつては「秘事」「重事」として隠しておくことが、このメンバーの間では「能々存知すべ」きこととされ、宮主の兼豊は知っている限りの知識を采女に語り、さらに関白殿下も「御問答有り」とあって、「秘事」は語ることに加わってくる。「秘事」が当事者の間では、おしゃべりの渦と化しているのである。

そしてこの渦の中で何が起こっていたかという点、過去にやはり宮主と関白殿下との間で交わされた、本柏の「秘事」をめぐる問答の記録（「代々の次第・記録」、すなわち「延慶の兼日問答の記」）が引用されていて、そこからうかがい知ることができる。それによると、本柏という器は何枚の柏の葉を綴り合わせて作るか、またその根元はどうやって縛る

のか、といったごく微細なレベルで、相異なる説がぶつかり合っていることがわかる。つまり、「秘事」をめぐる口々に説を語り出すことを通して、祀り方のある一部分が関心の的として突出してきて、さらにそこを目指していくつもの説が集まり、互いによつかり合う。「秘事」とは、単なる秘匿ということではなく、まさに「技」をめぐる競合の坩堝にほかならなかつたのだ。

ところで時代が下ると、この宮主にとっての特別な知識を、祭祀に関与しない全くの部外者に公開してしまつた者が出てくる。それが、連歌師宗祇の求めに応じて卜部兼俱が書き記した、『大嘗会神秘書』⁽⁸⁾である。この中で本柏に閱して、「深秘の口決なり。宮主臨期に調申事、秘の中の秘たる故にや。」と、秘事である由縁を語り出す。神殿の中の宮主の席は、天皇と陪膳采女がいる奥の部屋と、高橋や安曇たちの行列がならぶ入口とを繋ぐ控への部屋であり、その控への部屋の中でも、奥の部屋へ通じる、中戸の脇という特別な場所である。そこに席を占めて、「臨期」——行列の運んできた神饌が神殿の入口から奥の部屋へ運び入れられ、奥の部屋では運び込まれた御食の一つ一つを平手という器に順番に盛っていくという、こうした儀式のさなかに、宮主は一人黙々と本柏作りをしている。出来上がった本柏は、やがて奥の部屋に運び入れられ、陪膳采女が手に取って天皇に手渡し、天皇は手づからこの本柏に御酒を盛り神食薦の上に載せて神に奉る。本柏は、それを手に取る者みんなにとっての「秘事」「重事」のはずだが、卜部兼俱は、儀式のさなかに特別な時間に、中戸の脇という特別な場所で作るといふ、宮主にとっての「秘事」であることを強調する。このように、祭祀の場からは遠く離れたところでも、本柏作りという祭祀行為の中で、「臨期」といふ一点が新たに「技」として浮かび上がり、特別な意味に仕立てられていった。

この卜部兼俱が「臨期」を発見したのと匹敵することとして、先の安曇宿禰刀が御食を捧げてならぶときの「順番」

に突如として過敏になったこと(①の記事)も捉えられよう。つまり、「技」の発見である。また、本柏の作り方をめぐって関白殿下と宮主が問答をしていくなかで、技術の細部がどんどん問ひ返されていったことも、安曇氏と高橋氏および天皇が、一連の事件において新たな説を作り出していったことと通じる。

このように、中世の秘事口伝類と八世紀末の『高橋氏文』引用の太政官符とをひき較べてみると、「技」の展開という点で共通性が見い出せる。しかし、八世紀末の高橋氏と安曇氏の論争のやり方が、中世の関白殿下と宮主の問答に対して持ちうる固有性として、起源神話の創出ということが挙げられる。高橋氏と安曇氏にとって、祀り方の説の正しさは、起源神話のもつ力としてあらわれる。祀り方の説そのものを、突発的なことばや動作の投げ掛け合いとして表現し競うだけではなく、起源神話を書くという行為によっても競い合ったのである。次章では、この起源神話の記述をめぐる競合を、ひきつづき太政官符でみてみよう。

四 作り出される起源神話

③の記事で挙げた事件の後、高橋波麻呂と安曇広吉は両者とも祓を科され、喧嘩両成敗のようなかたちになったが、高橋波麻呂は自分には罪はないことを天皇に向かって主張し、その結果天皇の勅判が下り、安曇広吉はより重い祓を科されることになった。つまり、天皇によって、安曇氏の主張する祀り方の説は再び却下されたわけだ。そこで安曇広吉が次に起こした行動が以下のものである。

④ その後広吉ら妄りに偽辞を以て氏記に加附し、これを以て申聞し、自ら先たることを得。これに因りて、高橋朝臣

ら敢へて訴へを披かずと雖ども、しかして憂憤の状、稍顕れ出づること有り。

「氏記」とは、日本書紀などの国史に対して、氏サイドの書である。「妄りに偽辞を以て氏記に加附し」とは、氏記に新たな内容を書き加えること自体が、「妄り」で「偽辞」とされたのか、それとも書き加えるという行為は問題ないが、その内容に偽りがあるとされたのか。このことは、八世紀末から九世紀初めの一時期において、氏々が職の起源神話や技術をテキストに書くというのは、氏々にとつてどのような意味をもつ行為だったのか、もしくはどのような意味をあらえてそこに見つけようとしていたのかといった、氏文論にとつての記述という問題を突きつける。この後の一連の記事でも、まさにそうした問題が問われつづけているようだ。

さて、「氏記に加附」したということの具体的な内容のあらましは、後で明かされるところによると、「御間城入彦五十瓊殖天皇の御世、己等が遠祖大栲成吹、始めて御膳を奉る」という、安曇氏の職の起源神話であった。なんと安曇広吉は、自分で新たな起源神話を作り出し、テキストに書き加えてしまったのだ。この「御間城入彦五十瓊殖天皇」とは、崇神天皇のことである。一方、日本書紀によると、安曇氏が御膳に奉仕した起源は応神天皇の世で、高橋氏はそれより四代前の景行天皇の世であり、高橋氏の方が起源が古い。それに対して安曇広吉が書き加えた起源は崇神天皇の世であつて、高橋氏の景行天皇の世よりも二代古い。つまり安曇広吉は、起源となる事績の歴史的な古さを、起源神話の記述によつて作り出したのである。その結果、安曇が高橋の前にならぶという安曇氏の説が受け入れられ、高橋氏は憤慨しつつもその説に従うほかなかつた。起源神話の創出という表現行為によつて、この時点では安曇氏が高橋氏を圧倒したのであつた。

ところで、安曇広吉のこの行為に対して「妄り」「偽辞」と評したのは、この太政官符が出された延暦十一年の時点で太政官のコメントである。安曇広吉本人にしてみれば、高橋・安曇の順番の祀り方は正しくなく、安曇・高橋の順番こそ正しい祀り方であり、このような祭祀のあり方を支える世界像として、高橋氏よりも古い世に安曇氏の始祖が御膳に奉仕したという起源神話は、「偽辞」ではなく真実であった。この、今まで書かれなかった神話をテキストに書き加えるという行為は、いわば「埋もれた神話」をこちら側の世界にあらわしてくるという営みだったと言えよう。

こうして起源神話の事績の古さが問われるようになると、次には、その起源神話をいかに書くかという、記述の技術が問われ始める。右の記事の事件から十七年後の延暦十一年に、再びこの安曇広吉の手が加わった安曇氏の氏記が注目を浴びる時が来た。この氏記に対する太政官のコメントが次のものである。

⑤ 仍りてその私記の文を検するに、行の下に追ひて注し、筆迹殊に拙く字庶ちかからず。奸詐の端あはれここに見れたり。

「私記」は先の「氏記」と同じだろう。私記の本文の行の下の箇所に、追記の形で記されている字の筆跡を見るに、特に稚拙で本文の字と似ていない、とコメントされている。この部分がおそらく、安曇広吉が書き加えた「遠祖大栲成吹」の事績であろう。ここで問題になっているのは、事績の内容ではなく、一枚の紙の上での文字の位置や配列、字体・形といった筆跡についてである。この書きわざに、「奸詐の端」が顕れていると言う。遠祖大栲成吹に関する起源説話の真偽が書きわざに顕れるとは、どういうことだろうか。

それは、起源神話を書くときの「技」が、単なる上手い下手という意味での技術ではなく、隠れている真実もしくは

神のことを、こちら側に引つ張り出し顕してくるための力として捉えられていたのだろう。そのような力の問題として、高橋氏の書きわざと安曇氏の書きわざは競われ、高橋氏の起源説話は真、安曇氏の起源説話は偽とされる。どのような順番で御食を運ぶのが正しい祀り方なのかという祀り方の真偽が、記述という「技」を通してあらわれてきたのである。このように、氏文を記述するという行為も、「技」という視線をもつことによって、いかに神を祀るかという祭祀実践と一続きのものであり、さらに祀り方の「技」をめぐる競合に向かって開かれていたことがわかる。そしてさらに、この「技」の競合が生み出してしまふ、祭祀の場での力関係は、〈天皇〉という王権の問題へと我々を導いていく。次章では、氏々と天皇とが、祀り方の「技」をめぐる論争し競合していくという、この出来事のもつ、普通には考えにくい奇異な面について注目してみよう。

五 論争する氏と天皇——祭祀の実践者として——

⑥ 延暦八年…乃ち高橋氏の先たるべきことを知りぬ。而して事は先朝を經、卒に改むること忍びず。欲くは一は先、一は後と、彼此憂ふること無からしめんと思ふ。

これは、前章で見た⑤の記事（延暦十一年）以前に一度、高橋氏と安曇氏の氏文が提出されることがあって、その時の天皇のコメントである。「事は先朝を經」というのは、④の記事にあったように、安曇広吉が新たな起源神話を作り出し氏文に記述したことで、安曇が高橋の前という順番の祀り方が正しいとされ、その後の一時期、実際にその祀り方で祭祀が執り行われていたことを指す。しかしこの⑥の時点では、やはり高橋が安曇の前という順番が正しいということ

になる。⑤の時とは異なり、安曇広吉の記述した起源神話が「偽辞」だとされたわけではないようだから、高橋・安曇という順番の祀り方を主張する説を支えているのは、⑤の時の書きわざではないだろう。

ともかく、何か別の根拠を引つ張り出してきて、天皇は高橋・安曇という順番の説を主張するのだが、さらに驚くべきことは、この「累世神事」の祀り方という謂わば正統的な説に対し、自ら異説を作り出していく。すなわち、「一先一後」——二氏の間で一回づつ順番を入れ換える——という、今までにない全く独自の祀り方を勝手に創出してしまっているのである。それによって、「一先一後」の天皇の説と、安曇・高橋の順番という安曇氏の説が真つ向から対立し、事態は高橋氏と安曇氏との論争から、天皇と安曇氏の論争へと移っていく。

⑦ 而して今、内膳司奉膳正六位上安曇宿禰継成、去年六月・十一月・十二月三度の神事、頻りに前に在ることを争ひ、猶肯ひ進らず。仍りて先後を遞たがひにすべきの状を勅す。比来頻りに已に告げ訖んぬ。此度次に依りて高橋を先たらしむべし。而して継成、宣勅を奉らず、直ちに出でて退き、竟に供奉せず。

天皇が創出した「一先一後」という説に対し、安曇継成は、安曇・高橋という順番の自分の説にあくまで固執し譲らず、とうとう「一先一後」の祀り方で行うことを拒絶して、祭祀の場から勝手に退出し、祭祀に奉仕しなかった。こうなると、祀り方をめぐる天皇と安曇氏との争いである。この後、安曇継成は結局罰せられることになるのだが、今回の祭祀という時点に限ってみれば、天皇の主張する「一先一後」の祀り方は一度も実現されることはなく、また去年の六月・十一月・十二月三度の神事では安曇・高橋という順番の安曇氏の説が実現されていたが、今回の祭祀ではそれも実

現されず、その点では天皇と安曇氏はイーヴンだと言えよう。強いて言えば、安曇氏不在という今回の祭祀は、②の記事で高橋氏が主張した、高橋だけが神饌を捧げ安曇は並ばないという、かなり極端な異説が実現したということになるか。

このように、天皇と安曇氏が、ある意味で対等なぶつかり合うことができるのはなぜなのだろうか。何故ぶつかり合う一点が生じうるのだろうか。ぶつかり合うには、双方の力が拮抗していなくてはならない。しかし一方は天皇で、一方は一族族である。政治機構上の隔たりもさることながら、祭祀の場での、神との関係の近き遠さという力関係においても、天皇には他の祭祀実践者に対する優位性というものが、やはりあった。

それは、高橋氏や安曇氏が、それぞれ鯨の羹や海藻の羹といった、一つの神饌にしかタッチできないのに対し、天皇は氏々が運んでくるすべての神饌にタッチできるということ。つまり、神饌に触れ、その神饌の内実を知っていると、関わり方の範囲の広さが、天皇と氏々とは格段の差があるということだ。そしてさらに、籠や筥に入れて運ばれてくる神饌を、器に盛り分け神座に並べるといふ「技」を、天皇は独占することができる。

こうした自分のもつ優位性について天皇自らも饒舌になっていくのは、中世を待たねばならない。中世大嘗祭では、撰閲家をはじめとする諸職の家々が、この天皇の「技」についてそれぞれ説を造っていくようになり、それに対抗して天皇も、正しい説なるものを造るべく御記に記述していく。院政期の後鳥羽院が書いた『後鳥羽院御記』には、その辺りの動向が詳しく出ているので、その一部を見てみよう。

陪膳采女越中を召し、大嘗會卯日の御陪膳の儀を問ふ。安芸の仮名記と称して草子一帖持ちてこれを読む。違失等

少々これ有り。仍りて委しく細かに神膳に供ふべき次第を教訓せしむるなり。この説々能く能く秘藏すべきの由仰す。神膳に供ふる様、諸家の記の説々是れ同じからず。……⁽⁹⁾

「御陪膳の儀」というのが、天皇が神座の前で行う「技」であり、「陪膳采女」とは、その儀に唯一立ち会うことのできる、天皇の介添えをする者である。天皇の「技」について、この陪膳采女という職サイドで「安芸の仮名記」（「安芸」は陪膳采女の名である）というテキストが作られていて、代々の陪膳采女の間で伝えられていた。そこに書かれてある内容は、「違失等少々これ有り。」とあるように、天皇サイドの説と異なるところがあったようだ。例えば、この引用した部分の後ろに出てくる記事には、神座の上での器の配列の仕方について論じられており、ここで「白河院の御説」という天皇サイドの説と「陪膳采女安芸の説」と、相異なる祀り方の説が対立している。

また、「諸家の記」という家々のテキストもあり、「説々はれ同じからず。」とあるように、これらも天皇サイドの説とは異なっていたようだ。例えば、神饌の一つである御飯に関して、「諸家の記」の説は、籠二つに入れられ、その二つとも米の御飯だというのだが、正しい説は籠四つで米の御飯二つ粟の御二つだと、後鳥羽院は主張する。そして、これについて、「是は秘事なり。刀自采女にはこの旨存じ、しかるに他はこの旨知らず。」と言う。実際に神座の前で「技」を実践する天皇と、それを側で見ている陪膳采女しか知ることのできない秘事であって、他の者、つまり諸家の者たちは知らないことなのに勝手に異説を造っている、という主張である。

このように、神膳に供える次第に関する注記を自ら書き記すという営みを通して、後鳥羽院は天皇の「技」をめぐるいくつもの説がぶつかり合う地点に身を乗り出していった。そしてそこで、天皇の「技」の独占（「秘事」という優位

性を、御飯の籠の数という知識を手掛かりにして、発見し、祭祀技術としてさらに展開していった。天皇の「技」を、他の家々の者に対する秘事としてわざわざ特権化することによって、優位性を造作し作爲していくのだ。つまり、祭祀実践者としての天皇の優位性とは、結果としては王権という秘儀の体系化・制度化に行き着くとしても、しかし造作・作爲という行為の最中においては、他の祭祀実践者たちとの、力関係をめぐる競合にさらされていたのである。⁽¹⁰⁾

ここで再び、高橋氏と安曇氏と天皇の論争に目を転じよう。すると、『後鳥羽院御記』では、天皇の「技」をめぐって、天皇の説と家々の説が競合していたのに対し、ここでは神饌を捧げて運ぶという高橋氏と安曇氏の「技」をめぐって、最終的には安曇氏と天皇が説を競い合わせていたという、逆転の関係にあることに気づく。しかしさらに、高橋氏と安曇氏が問題にしている行列の順番とは、各自が捧げている神饌の間の順番であり、またそれは、神座での神饌の順番に連動している。そうなると、神座に神饌を配列していく天皇の「技」にも大いに関係してくるということだ。

つまり、行列の順番をめぐって最終的に安曇氏と天皇が説を競い合う（論争）というのは、表面的には高橋氏と安曇氏の論争に天皇が介入してくるように見えるが、実は反対に、行列の問題にこだわることを通して、天皇の「技」に高橋氏・安曇氏が介入してしまっていたのである。

それでは、氏々が天皇の「技」に介入し、天皇と説を競い合うというのは、どういうことなのだろうか。

そもそも、高橋氏と安曇氏が行列の順番にこだわるというのは、祭祀全体を統合する天皇に対し、一部分にしか関わることのできない、部分を職とする者の狭い視野からくる排他的な意識として説明されてきた。⁽¹¹⁾しかし、行列の順番、すなわち神饌の順番にこだわり始めるというのは、自分の捧げる御食だけではなく、自分の神饌と他人の神饌との関係、ひいては神座に運び込まれるすべての神饌全体を一つの天津御食として捉えた上で、全体として神饌がどのような順番

で神の前に届けばよいのかという、広い視野によって初めてもちうるこだわり方であろう。

そしてそれは同時に、すべての神饌に手を触れることのできる天皇に対し、高橋氏・安曇氏は、それぞれ自分の捧げる神饌にしか手を触れることはできないが、順番にこだわり出すことを通して、すべての神饌に関わりをもつことになる。神座の前に運び込まれるすべての神饌に対して、どのような順番で運び込めばよいかという、神饌全体に及ぼす祭祀技術を握ることで、天皇と同じく、すべての神饌に関わりをもつことができるようになるというわけだ。

このようにして、神饌を捧げ運ぶという高橋氏・安曇氏の「技」と、神饌を神座に配列するという天皇の「技」は、神饌全体の順番を左右できるという点で、同じだけの力をもって拮抗し競合していたと言えよう。それは、神饌を介していかに神と関わりをもつかという、神への関わり方が拮抗しているということだ。後鳥羽院が御記を書くことを通じて、天皇の「技」の優位性を発見したのと同様に、高橋氏・安曇氏は論争を通じて、自分たちの「技」の優位性を造作していったのである。

氏々と天皇の対決——。「高橋氏文」とは、かくもラジカルな書物であった。

注

(1) 早川万年「高橋氏文成立の背景」(『日本歴史』五三三号、一九九二・九)は、延暦を中心とする一時期に集中して、氏々が自己主張し対立・競合が起ったことについて、この時期の氏々の自己主張が、宮廷祭祀への関わり方をめぐってなされていることを指摘する。

(2) 西宮一民(岩波文庫『古語拾遺』解説)

(3) この問題に関しては、拙稿「高橋氏文」と実践——「料理」する宮廷宗教者たち——(『古代文学』34号、一九九五・

三)で考察した。

(4) 以下、高橋氏文の引用はすべて、『神道大系』古典編13に所収の原文を、私に訓み下した。

(5) 多田一臣「高橋氏文」(『古代文学』21号、一九八二・三)

(6) この「順番」を、「技」として捉えるといった時の「技」について、ハイデッガーが論じる、ギリシア哲学の元初的思索における「技術(テクネー)」が示唆的である。すなわち、「技術はしたがって、単に手段ではない。技術は露わに発く一つの在り方である。このことに注意すると、そこで技術の本性に関して全く異なった領域が私たちに開けてくる。それが、露わに発くこと、すなわち真理の領域なのである。」(マルティン・ハイデッガー「技術論」、『ハイデッガー選集』18巻、理想社)

(7) 安江和宣「神道祭祀論考」(神道史学会、一九七九)に所収の原文を私に訓み下した。

(8) 『践祚大嘗祭 資料篇』(田中初夫編、木耳社、一九七五)に影印が収められる。

(9) 建暦二年十月二十一日の後鳥羽院の御記が別名『大嘗会神饌秘記』として伝わる。『神道大系』朝儀祭祀編5・践祚大嘗祭に所収の原文を私に訓み下した。

(10) 中村生雄『日本の神と王権』(法蔵館、一九九四)第二部第一章「秘儀としての王権」も、神饌供神における天皇の秘儀の専有を、意図的に作り出されたものだという見方をしている。ただ、秘儀を専有する側と他に専有をゆだねる側が、共に天皇を中心としたタブーの体系化に参画していると言う点、本稿と対立する。本稿は、秘儀を専有する側(天皇)の作為に対し、他の者たち(氏々)も自分の秘儀をそれぞれ作り出し、天皇と競合していることを見ようとするものである。

(11) 西郷信綱「大嘗祭の構造」(『古事記研究』未来社、一九七三)